英語で会話を継続・発展させる力を高める授業の在り方
－ピア・フィードバック活動を用いた言語活動を通して－

和歌山市立紀伊中学校
教諭　橘　　市　郎

【要旨】
本研究では，中学校外国語科において生徒が英語で会話を継続・発展させる力を高める授業の在り方を提案する。具体的な方法として，ピア・フィードバック活動を用いた言語活動（話すこと［やり取り］）を位置づけた指導例を作成した。ピア・フィードバック活動の際には，タブレットを用いて撮影した録画映像や，話そうとしている内容を可視化したワークシート等を活用した。単元を通して提案授業を行った結果，生徒は，会話を継続・発展させる力を高めることができた。また，授業に対する満足度も高いことが確認された。

【キーワード】
話すこと［やり取り］，会話，継続・発展，言語活動，ピア・フィードバック
フィードバック

１　研究のねらい

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編（以下，学習指導要領と略記）では，外国語の目標に「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」（※１）を育成することが示されている。しかし，平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査中学校英語における全国の各技能の正答率は，「聞くこと」68.3%，「読むこと」56.2%，「話すこと」30.8%（参考値）（注１），「書くこと」46.4%と，特に「話すこと」に課題があることが分かった。中でも，「聞いて把握した内容について，やり取りすることができるかどうかをみる」（※２）という問いの正答率は 10.5%であり，無解答が 20.7%であった。この結果から，会話を継続・発展させていくことに課題があることが分かる。そのため，授業においては学習指導要領で示されている会話を継続・発展させる方略（ストラテジー）（図１）を意識しながら継続的にやり取りをする機会を増やした指導の充実が求められる。

① 相手に聞き返したり，確かめたりする
② 相づちを打ったり，つなぎ言葉を用いたりする
③ 相手の答えを受けて，自分のことを伝える
④ 相手の答えや自分のことについて伝えたいことに「関連する質問」を付け加える

図１　会話を継続･発展させるストラテジー

筆者のこれまでの授業構成を振り返ると，文法訳読にかける時間が多く，「話すこと」では，パターンを示しすぎるなど，即興性を伴った活動の機会が少なかった。また，活動に対する振り返りの機会も少なく，生徒が自身の成果や課題を明らかにできていなかった。

白井（2012）は，第二言語習得において，大量のインプットが必要不可欠であるということを前提に，中学校においては，コミュニカティブ・アプローチ（以下，CA と略記）（注２）を基本としつつ，生徒に語彙・文法の正確さも意識させる指導が必要であるとしている。また，学習指導要領においても，会話を継続・発展させる活動においては，「指導の重点を内容の伝達に置きながら，活動中の言語使用について具体的にフィードバックしたり，活動後に生徒が自分の使用した英語について振り返り，場面に応じた適切な表現方法を確認する機会を与えたりすることも重要である。」（※３）と示されている。さらに，ジョン・ハッティ（2018）は，「『どこに向かっているのか』（学習目的，達成目標，到達基準），『進み具合はどうか』（自己評価），『次に何をすべきか』（次の段階，新しい目標）という問い

に答えることこそが，フィードバックであるといえる。」（※４），「学習者が他の学習者を教える場合，教えられる側と同等の学習成果が教える側にももたらされる。」（※５）と述べている。

そこで，英語で会話を継続・発展させる力を高める授業として，語彙・文法を学び，英語で伝え合う活動を継続的に行い，活動中の言語使用について，生徒の振り返りや確認が効果的に行われるようにするために，教師から生徒への「フィードバック」とともに，生徒同士で行う「ピア・フィードバック」を言語活動の振り返りに取り入れる。

なお，本研究では，生徒同士が互いに言語活動による成果物に対してよかった点や改善点等を伝え合うために行う活動を「ピア・フィードバック活動（以下，PFB 活動と略記）」とする。

２　研究内容

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料中学校外国語」（2020）で図式化されている「話すこと［やり取り］」の単位時間における指導例を基に，言語活動の振り返りに PFB 活動を用いた授業の具体的な指導例を筆者が作成した（図２）。図中の③～⑥の【展開部の活動サイクル】を繰り返し，生徒が改善点等を意識しながら言語活動を行えるような機会をできるだけ多く設定する。以下に，①～⑦について説明する。

①目標・評価基準の確認

単元・本時の目標及び評価基準を提示する。生徒が学習目的，達成目標，到達基準を意識しながら PFB 活動を行うことができるように留意する。

②目的・場面・状況及び言語材料の確認

言語活動で話す内容を考えるために，目的や場面，状況などを示す。指導したい言語材料が使用される自然な場面を設定し，使用させたい言語材料を教師が自ら使って生徒とやり取りを行い，意味と使い方の気付きを促す。また，当該言語材料が使用されている文章を多く聞いたり読んだりできる機会を設定する。

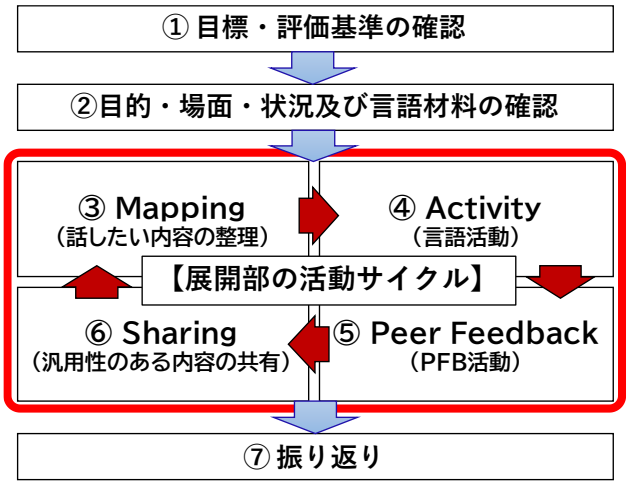

図２　「『指導と評価の一体化』の参考資料」を基に筆者が作成した指導例

③Mapping

学習指導要領において，「自分の考えなどを短時間で構成して伝え，質問に応答できるようになるための橋渡しとして，大まかな流れや主要な点を書いたメモに基づいて伝え合うなど段階的に指導することが大切である。」（※６）と示されていることから，話す内容をワークシート（以下，Mapping Sheet）に単語や語句で記入し整理する。話そうとしている内容を可視化することができる Mapping Sheet は PFB 活動でも活用する。

④Activity

２人１組でお互いの気持ちや考えを伝え合う言語活動を行う。本研究では，単元末のスピーキングテストにおいて十分に力が発揮できるようにするため，言語活動はテストと同じ内容で行う。活動内容はタブレット端末で録画し，PFB 活動や評価で活用する。ただし，即興性を高めることや，様々なピア・フィードバックが生まれるように毎回パートナーを変えながら繰り返し言語活動を行う。

⑤Peer Feedback

生徒は，言語活動による成果物に対してよかった点や改善点等を伝え合う PFB 活動を行う。ジョン・ハッティ（2018）は，「フィードバックを効果的なものとするには，その内容が明確で，目的的であり，学習者の先行知識とのつながりがあり，次の学習を行うことを誘発し，課題の複雑さを軽減し，目標達成に確実につながるようなものであり，できる

だけ人格を傷つけないようなものである必要もある。」（※７）としている。教師は，PFB 活動中の生徒の様子を観察し，生徒を勇気づけ励まし続けると同時に，生徒の不安や疑問点に耳を傾ける。個別にフィードバックを行う場合は，教師自身が効果的なフィードバックを意図的に行い，生徒のモデルとなることに留意する。

⑥Sharing

汎用性のある生徒の発話内容を例として取り上げ，何を伝えるとより良くなるかを全員で考えることや，教師からのフィードバックを通して改善点を共有することも行う。板書は，言語面（知識及び技能）と内容面（思考力・判断力・表現力等）の２つに分けて書く。言語面については，「単語だけによる発話を文にする」，「語順の誤りを修正する」，「発話には表れなかったが，頭の中で言おうと考えた内容も確認し，それを英語ではどのように表現するのかを確認する」などがある。内容面については，「目的や場面，状況などに応じた発話内容になっているかという点を確認する」，「会話を継続・発展させるストラテジーを活用しながら，会話中の不自然な間をなくすための発話を確認する」などがある。

⑦振り返り

PFB 活動でクラスメイトからもらったアドバイスや Sharing の内容を参考に，振り返りシート（以下，Step by Step）に「今日できたこと」及び「次にできるようになりたいこと」の２つに分けて記入する。ジョン・ハッティ（2018）は，「重要なのは，学習者に見合ったもの，あるいは１つ上のレベルのフィードバックを与えることである。」（※８）と述べていることから，それぞれの生徒が自身の学習の進み具合と次の目標を可視化することができる Step by Step は PFB 活動でも活用する。

３　本研究における評価方法

白井（2012）は，外国語教育プログラムが機能しているかを評価するには，①実際に外国語能力が身に付いているか，②生徒がその授業に対して満足しているか，の２点が重要だとしている。本研究では，①に対してはスピーキングテスト「話すこと［やり取り］」，②に対しては授業評価アンケートを用いた。

（１）スピーキングテスト「話すこと［やり取り］」

スピーキングテストの作成及び実施に当たっては，受検者同士のやり取りが行われるケンブリッジ英語検定のスピーキングテスト（A２　Key for School）（2019）を参考に行った。内容は「６つのユニバーサルデザイン（以下，UD と略記）商品の中から家族に喜んでもらえるものを１つ選ぶために，クラスメイトと 90 秒間英語でやり取りを行う」とした。提案授業の事前と事後の変容を見取るため，第１時の言語活動と第９時のスピーキングテストを同じ内容，同じペアで行った。そして，評価は録画映像（注３）を基に行った。

スピーキングテストの評価（表１）に当たっては，語彙・文法の正確さよりも内容の伝達に重点を置く CA を基本とする授業のねらいを踏まえ，「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の観点の点数を２倍にして 15 点満点とした。加えて，評価基準の一部に，条件として，会話を継続・発展させるストラテジー（図１）の使用を求めた。

表１　スピーキングテストの評価基準

点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
3	誤りのない正しい英文でやり取りができる	「２」を満たし，相手の発話に対して，質問をして会話を広げている 条件：ストラテジー④も使用	「２」を満たし，相手の発話に対して，質問をして会話を広げようとしている 条件：ストラテジー④も使用
2	単語での応答や，文法の誤りが一部あるが，コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いてやり取りができる	家族が喜ぶ理由と UD（商品）について話している 条件：ストラテジー①②③の使用	家族が喜ぶ理由と UD（商品）について話そうとしている 条件：ストラテジー①②③の使用
1	無解答ではないが，「２」を満たしていない		

（２）授業評価アンケート

質問項目は，Ｑ１「PFB 活動を用いた言語活動を取り入れた授業は楽しかったですか」，Ｑ２「Unit の最初と最後のやり取りの映像を比較して，やり取りの技術が向上したと思いますか」，Ｑ３「PFB 活動が，やり取りの技術を向上させるのに役立ちましたか」，Ｑ４「もっと英語が話せるように，今後も PFB 活動を用いた言語活動を続けたいですか」の全４問とした。回答方法は４件法で行い，「当てはまる」を３点，「どちらかといえば当てはまる」を２点，「どちらかといえば当てはまらない」を１点，「当てはまらない」を０点と点数化し，合計点が高いほど，授業に対する満足度が高い回答とした。また，回答の理由を自由記述させ，数名の生徒にインタビュー調査を行った。

４　所属校における提案授業

（１）PFB 活動を用いた単元構想

所属校の２年生（63 名）を対象に，東京書籍 NEW HORIZON２　Unit５　Universal Design で単元計画（**表２**）を作成し，提案授業を行った。単元の指導は全９時間と設定し，単元を通して PFB 活動を用いた言語活動を行った。

表２　単元計画

単元目標		
家族に喜んでもらえる UD 商品を選ぶために，自分の考えを整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりして会話を継続・発展させることができる		
時	主な学習活動	PFB 活動の具体
1	・〈疑問詞 ＋ to〉の形・意味・用法の確認 ・UD 商品の使い方について英語で会話をする	言語活動を録画し，その映像を見ながら PFB 活動を行う
2	・教科書（Scene①）の内容を読み取る ・UD 商品の使い方について英語で会話をする	言語活動を録画し，その映像を見ながら PFB 活動を行う
3	・〈主語 ＋ 動詞 ＋（人）+疑問詞 ＋ to〉の形・意味・用法の確認 ・UD 商品のより具体的な使い方について英語で会話をする	言語活動を録画し，その映像を見ながら PFB 活動を行う
4	・教科書（Scene②）の内容を読み取る ・UD 商品のより具体的な使い方について英語で会話をする	Step by Step や Mapping Sheet をパートナーと交換し，PFB 活動を行う
5	・〈主語 ＋ be 動詞 ＋ 形容詞 ＋ that〉の形・意味・用法の確認 ・UD 商品を渡したときの家族の反応を想像して英語で会話をする	Step by Step や Mapping Sheet をパートナーと交換し，PFB 活動を行う
6	・教科書（Read and Think①，②）の内容を読み取る ・UD 商品を渡したときの家族の反応を想像して英語で会話をする	Step by Step や Mapping Sheet をパートナーと交換し，PFB 活動を行う
7	・家族が喜ぶ UD 商品について，自分の考えを整理し，英語で会話を継続・発展させる	言語活動を録画し，発話内容の Dictation を行い，PFB 活動を行う
8	・家族が喜ぶ UD 商品について，自分の考えを整理し，英語で会話を継続・発展させる	４人グループ内で２ペア（言語活動と観察）を作り，PFB 活動を行う
9	・スピーキングテスト	スピーキングテストを振り返り，PFB 活動を行う

（２）PFB 活動の具体

今回の提案授業において行った PFB 活動は**表２**に示すとおりである。第１時から第３時は，言語活動の録画映像を何度も見直しながら PFB 活動を行った。第４時から第６時は，パートナーが意識しているところや，話そうとしている内容を可視化するために Mapping Sheet や Step by Step を交換し，その内容を参考にしながら PFB 活動を行った。第７時は，言語活動の録画映像を見ながら発話内容の Dictation を行い，発話内容を文字に起こした。併せて，英語表現がわからず言えなかった内容についても日本語で記入

した。その後，PFB 活動を行い，改善点を記入した。第８時は，４人グループ内で２ペアを作り，言語活動を行うペアと観察をするペアに分かれて活動し，その後４人で PFB 活動を行った。

５　結果

（１）スピーキングテスト

提案授業における第１時の言語活動と第９時のスピーキングテストを比較すると，全員の点数が向上しており，伸びた点数が小さい生徒で１点，大きい生徒で最大 10 点であった。また，平均点においても 6.6 点から 13.4 点に向上していた。第１時，第９時ともに平均点に近かった生徒 A，B のやり取りの発話記録（**図３**）を見ても，第１時には日本語による発話や，不自然な間が目立ち，ストラテジーも活用できていなかったが，第９時にはストラテジーを活用しながら英語で会話を継続・発展させている様子が見られた。

第１時　言語活動	第９時　スピーキングテスト
A：What universal design product do you want? B：えー，I want to scissors. A：えー，何て言うん？　①Smart scissors? B：Scissors. A：②OK.　次おれ？ こう聞くん？ B：What universal design product do you want? A：I want to bottle opener because…んー，んー，えーわからん！　Because no power.　わからん！ B：No power… A：力がいらない，あまり力がいらない，No power. わからん，No power! わからん，わからん… （…この後も，日本語による発話や，無言が続いた） ① 相手に聞き返したり確かめたりする ② 相づちを打ったり，つなぎ言葉を用いたりする ③ 相手の答えを受けて，自分のことを伝える ④ 相手の答えや自分のことについて伝えたいことに「関連する質問」を付け加える ※発話内のストラテジーを下線及び丸数字で示す	A：What universal design product do you want? B：I want smart scissors. A：②Oh, ①you want smart scissors.　③I want bottle opener.　④Who do you give it? B：My sister. A：②Oh. B：Because I think that my sister will be happy. A：②Oh, nice! B：④How about you? A：My mother.　Because…②well, my mother has no power.　②Well…so I'm sure that my mother will be happy. B：②I see. A：④Do you know how to use it? B：Yes, I do. A：④Can you tell me how to use…②well, ④smart scissors? B：Sure. （…この後も，90 秒間会話を継続・発展させていた）

図３　第１時の言語活動と第９時のスピーキングテストにおける生徒 A，B の発話記録

（２）授業評価アンケート

全てのアンケート項目で 90%以上の生徒が「当てはまる」,「どちらかといえば当てはまる」と回答をしていた（**表３**）。

表３　授業評価アンケート（n=63）

質問項目	３点	２点	１点	０点
Q１　PFB 活動を用いた言語活動を取り入れた授業は楽しかったですか	77%	22%	1%	0%
Q２　Unit の最初と最後のやり取りの映像を比較して，やり取りの技術が向上したと思いますか	88%	11%	1%	0%
Q３　PFB を与え合うことが，やり取りの技術を向上させるのに役立ちましたか	73%	22%	5%	0%
Q４　もっと英語が話せるように，今後も PFB 活動を用いた言語活動を続けたいですか	70%	22%	3%	5%

３点：当てはまる　２点：どちらかといえば当てはまる　１点：どちらかといえば当てはまらない　０点：当てはまらない

（３）考察

第９時のスピーキングテストと授業評価アンケートの結果を示した散布図を作成した（図４）。以下に，図中の生徒を**ア～オ群**に分け，それぞれの第１時から第９時へ伸びた点数（図５）も参考に結果を示す。

ア群の生徒へのインタビュー調査で，「うまくピア・フィードバックを与え合うことができたのはなぜですか」と尋ねたところ，「言語活動の録画映像を何度も見直せたから」，「パートナーと Mapping Sheet や Step by Step を交換することで，話そうとしている内容がわかって PFB 活動がやりやすかった」という返答が複数あったことから，録画映像を活用したり，話そうとしている内容を可視化したりする PFB 活動の方法が生徒にとって有用なものであったと推察することができる。

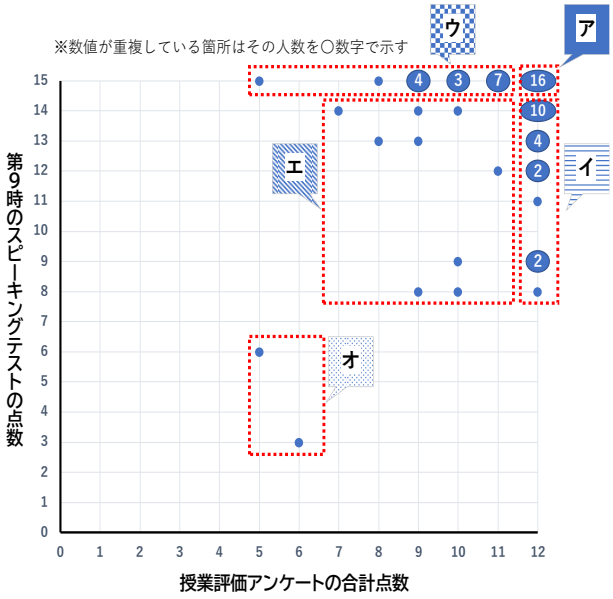

図４　散布図（n=63）

伸びた点数も９，10 点の生徒が 11 人と他の群に比べて多く，PFB 活動を用いた言語活動を充実させることが会話を継続・発展させる力を高めることに効果があることを確認することができた。伸びた点数が１点の生徒は，第１時の言語活動で 14 点であったために，伸び幅は小さくなるが，授業評価アンケートの「先生に教えてもらうだけじゃなくて，自分たちで教え合って改善した方が頭に残ると思った」という回答からも，PFB 活動で教える機会が多かった生徒も自身の成長を実感していることがわかった。

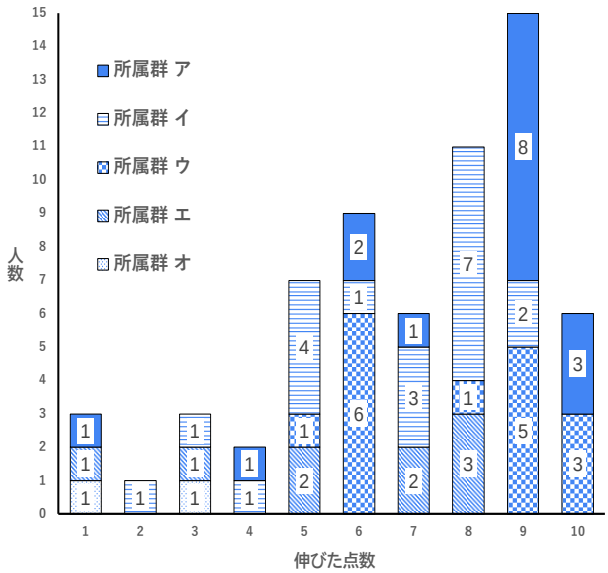

図５　所属群別の伸びた点数（n=63）

イ群の生徒は，スピーキングテストで課題が見られた。第１時の言語活動と比較すると改善はできていたが，会話のストラテジーを活用できず，途中で不自然な間がある生徒が多かった。授業の Sharing 時に取り扱った内容もあったが，定着にはある程度時間を要することがわかった。

伸びた点数が２点の生徒は，第１時の言語活動で６点，スピーキングテストで８点と伸び幅は小さいが，授業評価アンケートの合計点数は満点であった。また，多くの生徒が，「わからないところもいろんな人とピア・フィードバックをしてだんだんわかっていくのが嬉しかった」と回答していたことからも，伸びた点数の大小に関わらず，言語活動を用いた PFB 活動を通して生徒が自身の成長を実感したことで授業に対する満足度が高まったと考える。

ウ群の生徒は，授業評価アンケートで提案授業に対する不安や満足度が低い回答が見られた。その理由には，「相手によっては PFB 活動が難しかった（４名）」，「相手の改善点を見つけるのが苦手（３名）」などがあった。授業評価アンケートの合計点数が５点であった生徒は，特に相手の改善点を見つけることに苦手意識をもっており，授業評価アンケートＱ４の「もっと英語が話せるように，今後も PFB 活動を用いた言語活動を続けたいですか」

にも「当てはまらない」と回答していた。しかし，インタビュー調査では，「書いている内容からは改善点を見つけやすかった」と Dictation の有用性を実感していた。さらに，該当生徒とペアを組んでいた生徒にインタビュー調査を行うと，「４人組で PFB 活動をしたときはたくさんアドバイスをしてくれた」という返答だった。他の授業評価アンケートの回答では，「本文や文法をする時間がもう少し欲しかった（４名)」という定期テストを意識する意見があったものの，当該生徒に定期テスト後インタビュー調査を行うと，「言語活動で話した内容はワーク等の問題も解きやすく，テストでも答えることができた」という返答だった。

伸びた点数が 10 点の３名においては，授業評価アンケートの合計点数も 11 点であり，授業に対する満足度が高かった。

エ群の生徒の中で，伸びた点数が７点，８点であった５名へのインタビュー調査では，「会話のストラテジーの使い方を友達に教えてもらって会話が続いた」という返答が複数あった。一方で，伸びた点数が１点，３点，５点の４名へのインタビュー調査では，「最初は仲のいい子とペアやグループを作り，PFB 活動に慣れたかった」，「相手によっては自分が教えるばかりで，あまり成長は感じられなかった」，「PFB 活動で友達に教えてもらった内容で理解できないことが多く，あまり成長できたとは思えなかった」という返答があり，ペアやグループによって PFB 活動への取り組み方に差があることがわかった。

オ群の生徒は，スピーキングテストで最初の 20 秒程度は話せたが，その後は沈黙や日本語による発話が多かった。２人とも英語に苦手意識がある生徒で，授業評価アンケート Q３の「PFB 活動が，やり取りの技術を向上させるのに役立ちましたか」にも「どちらかといえば当てはまらない」と回答し，理由は，「ピア・フィードバックを与えることも，受け取ることも難しかったから」としていた。しかし，インタビュー調査を行ってみると，「第１時の言語活動では一言も話せなかったが，第９時のスピーキングテストでは 20 秒話せて嬉しかった」，「Step by Step は自分のレベルに合わせて目標設定ができるからよかった」，「友達が教えてくれたおかげで最後は少しわかるようになって嬉しかったし，間違っても次は正解するぞという気持ちになれた」という意欲的な返答だった。

伸びた点数は１点，３点とスピーキングテストでは大きな成果は現れなかったが，Step by Step を活用しながら PFB 活動を用いた言語活動を繰り返す中で，自身の成長を実感していた。

６　成果と課題

研究の成果としては，大きく以下の２つが挙げられる。

１つ目は，多くの生徒が今回の提案授業を通して，英語で会話を継続・発展させる力を高めたことが挙げられる。スピーキングテストにおいても会話のストラテジーを活用しながら，英語で会話を継続・発展させていた。また，全ての授業評価アンケートの項目で 90％以上の生徒が「当てはまる」，「どちらかといえば当てはまる」と授業に対する満足度が高い回答をしていることや，インタビュー調査の返答からも，今回の PFB 活動を用いた言語活動は，楽しく英語で会話を継続・発展させる力を高めることができる活動であったと考える。

２つ目は，多くの生徒が PFB 活動の有用性を実感したことが挙げられる。特に，録画映像を何度も見直したり，Mapping Sheet や Step by Step を交換し話そうとしている内容を可視化したりすることへの効果を実感している生徒が多かった。PFB 活動を行うためには自身やパートナーの学習の進み具合を理解する必要があり，録画映像，Mapping Sheet，Step by Step を活用することでそれぞれの学習の進み具合がより明確になったと考える。加えて，効果的なフィードバックをお互いに与え合おうとすることで，ジョン・ハッティ（2018）の述べる，「学習者が他の学習者を教える場合，教えられる側と同等の学習成果が教える側にももたらされる。」（※５）が実現され，双方が学習者として成長し，PFB 活動の有用性の実感にもつながったと推察する。

研究の課題としては，ペアやグループによって PFB 活動への取り組み方に差があったことが挙げられる。スター・サックシュタイン（2021）も初期段階では生徒自身でグループをつくることが効果的であると述べていることから，今後は，ペアの組み方や活動グループの人数を調整することも考慮するとともに，生徒の様子を更によく観察し，教師が効果的なフィードバックの例を示すことや，PFB 活動を用いた言語活動を継続的に行うことが，生徒一人一人がより英語で会話を継続・発展させる力を高めるためには重要であると考える。また，一人の生徒が抱える不安や疑問点はその他の生徒にも当てはまる可能性があるため，出てきた内容をクラス内で共有し，多くの生徒が不安を解消したり，問題を解決したりすることが必要だと考える。

＜注釈＞

注１　学校の PC 端末等を利用して実施した「話すこと」は，「聞くこと」「読むこと」「書くこと」とは実施生徒数が異なるため，「参考値」として集計。

注２　第二言語教授法の１つで，形式（文法）よりも意味（内容）の伝達に重点を置く教授法。本研究では，インターアクション（やり取り）に参加することにより，わからないところを聞き返したりする「意味交渉」を通して言語習得が進む「インプット=インターアクションモデル」を指す。

注３　生徒が自身のタブレットを用いて言語活動の様子を撮影する。自身の発話内容が明瞭に聞き取ることができるように，各自ヘッドセットを着用して行う。

＜引用文献＞

※１　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編』開隆堂 p.10（2018）

※２　文部科学省『平成 31 年度(令和元年度)　全国学力・学習状況調査　報告書【中学校／英語】』p.76（2019）

※３　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編』開隆堂 pp.61～62（2018）

※４　ジョン・ハッティ『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化 p.173（2018）

※５　同上資料 p.189

※６　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編』開隆堂 p.62（2018）

※７　ジョン・ハッティ『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化 p.176（2018）

※８　同上資料 p.175

＜参考文献＞

・Cambridge Assessment English『Cambridge English Qualifications A2 Key for Schools Handbook for teachers for exams from 2020』(2019)

・教育課程部会『平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果』(2019)

・佐藤慎司『コミュニケーションとは何か　ポスト・コミュニカティブ・アプローチ』くろしお出版（2019）

・白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店 p.99（2012）

・同上資料 p.103

・ジョン・ハッティ『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化（2018）

・スター・サックシュタイン『ピア・フィードバック-ICT も活用した生徒主体の学び方-』新評論 p.104（2021）

・文部科学省『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　中学校　外国語』p.55（2020）

・文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編』開隆堂（2018）

・文部科学省『平成 31 年度(令和元年度)　全国学力・学習状況調査　報告書【中学校／英語】』(2019)